

- 1 派遣期日 平成22年8月7日(土)
- 2 研修先 教育夏まつり2010
主催者 NPO 法人日本教育再興連盟
会場名 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
所在地 神奈川県横浜市鶴見区小野町6

3 研修内容

「みんなと話す!世界と話す!科学で話す!」をテーマに、横浜サイエンスフロンティア高校を会場に行われた「教育夏まつり2010」に参加した。「教育夏まつり2010」は、NPO 法人日本教育再興連盟が主催し、横浜市教育委員会が後援、多数の企業が協賛するもので、教職員のみならず、企業や学生、保護者、子どもが参加し、テーマ展示・講演・授業・企画等が行われるユニークなイベントである。

外国語活動や国際理解教育についても先進的な取り組みが紹介されることから、視察先として選定した。研究テーマ「コミュニケーションの素地を養う外国語活動の在り方」を深めるべくいくつかの授業に参加したが、特に文部科学省外国語活動教科調査官・直山木綿子氏の講演「新学習指導要領の外国語活動」について報告する。

【外国語活動は特別なものではない】

- (1) 外国語活動を特別視しない。(特別だと感じるのはかまわない。)

教師が外国語活動を特別視する。



児童が外国語活動を特別視するようになる。



児童は外国語を話す人を特別視するようになる。

「世の中には、自分とは違った考えかもしれないが、いろいろな人がいる。自分もその中の一員である。」ということ教えるのが外国語活動である。

- (2) 自然体で指導する。

「big voice, big gesture, big smile で」は本当か?



実生活や他教科の学習では、「相手に伝わる話し方で」と指導しているはず

big voice ではなく, **clear voice**
big gesture ではなく, **good gesture**
big smile ではなく, **nice smile**



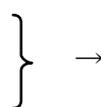
Hello, everyone.
How are you?
ファイン?ほんまか?
パターンを覚えて答えていませんか?

- (3) 学級担任としてできることがたくさんある。

<例1>題材に出会わせるとき:果物

△ 初めから絵を見せ、単語をリピートする → 単にその果物を知っているかどうかの確認にすぎない。

- 絵の一部を見せる
- 絵を一瞬だけ見せる
- 絵は見せずに英語でヒントを与える



提示の仕方を工夫することにより、児童が「何だろう」と考えたり、「ああそうか」と納得したりできる活動になる。

<例2>ゲームを取り入れるとき：funではなく、interestingに

△ 楽しいだけ → 授業ではなくレクリエーション

○ 明確にねらいを達成できるもの → 児童が「もっと～したい」という内容

↓

児童の実態、興味・関心に合致したもの

児童の実態把握やねらいの設定、指導法の工夫等は、学級担任が日頃から各教科・領域でも行っていることである。外国語活動を特別視せず、他教科の手法を取り入れるようにしたい。

(4) All Englishでなくてよい。

・ やれる人はやってもよいが、大切なのは子どもに届く言葉

・ 「ここは」という場面は、英語で

(5) どの子も積極的に参加できる手だてを

外国語活動は音声中心だが、音声だけで吸収し納得できる子ばかりではない。

↓

視覚に訴える

・ 音の高さが上下するのを手で示す

・ デジタル教材の活用

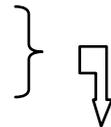
(例：電子黒板上で、果物を選びフルーツパフェを作る)



最初は指導者が選んだ言葉

次に代表児童が選ぶ

見ていた児童もやりたくなる



「～をしたいので、○○を選ぶ」という活動を仕組んでいくことにより、児童が自分の思いをのせた活動になる。

4 感想

日本教育再興連盟は、批判ではなく実践を通して日本の教育を考えようと、主義・主張を超えて参集した発起人らが設立したものである。会場となった横浜サイエンスフロンティア高校は創立2年目の新しい学校で、その名の通り理系の学習に適した最先端の設備は、大学にも劣らないものであった。まさしく「みんなと話す！世界と話す！科学で話す！」という「教育夏まつり」のテーマにぴったりの会場であった。そこに、各地で先進的な実践を重ねている授業者、全国から参加した教職員、多くの児童・生徒・学生や保護者が集ったこのイベントに参加したのは、大変有意義であったと思う。

直山木綿子氏の講演は、参加者（各地から集まった小学校教師）が5年生の児童になったつもりで受ける授業形式で行われた。直山氏は「外国語活動のカリスマ」と呼ばれ、多数の著作・講演等でも活躍されている。京都市の中学校教員・指導主事等を務めた経歴から、その主張は、現場を知り確かな実践に裏付けされたものであった。京都弁を交えた授業は、和やかな中にも終始一貫「外国語活動は特別なものではない」という、直山氏の明確な意図にあふれていた。それは日頃より外国語活動主任として、「小学校の教員が英語の授業をするのは、国語や算数を教えるのと同じ」と伝えてきた私の考えと一致しており、大変心強く感じた。特に、「学級担任としていつもやっていること、他の教科・領域の手法を取り入れることができる」という点を校内で伝達し、今後の指導に生かしていきたいと思う。また、定番の practice や game のみならず、近い将来導入されるであろうデジタル教材に触れることができたのも、大きな収穫であった。

今回の先進校等視察によって、今後の外国語活動への指針を得た思いである。このような機会を与えてくださった日立市教育研究会に心より感謝を申し上げたい。